

滋賀



News

第35号 2019年3月
滋賀グリーン購入ネットワーク
ニュース



～ 滋賀から「グリーン経済」をつくる～

まもなく設立20周年!

～ グリーン購入から始まり、ひろがる、
会員連携による様々な活動 ～

グリーン購入の取り組みを地域に広げるために、1999年に滋賀県の呼びかけで設立された滋賀グリーン購入ネットワークは、2019年に設立20周年を迎えます。この20年間で会員数は2倍近くに増え、予算規模も含めて活動は大きく広がりました。

また、県政モニター調査の結果による滋賀県内のグリーン購入の認知度を見ると、2010年度67.7%が2017年度には88.9%※となり、電通による2013年度の調査で全国的な認知度が34.2%とされていることと比較しても、県内におけるグリーン購入の認知が広がっていることが分かります。これは、400を超える会員企業・団体が連携して活動してきたこと、とりわけ毎年10月に実施する「グリーン購入キャンペーン」において、会員企業・団体が広報誌や機関誌を通して、また店頭や事務所内での啓発活動を通して、地域における啓発活動を継続的に実施してきたことが大きいのではないかと考えられます。

今後も、引き続き活動の軸足は「グリーン購入の推進」に置きつつ、グリーン購入に留まらない環境負荷低減活動へとさらに活動を拡大・発展させるために、20周年を機に**団体名称の変更**についても役員会を中心に検討しているところです。

	設立時	2018年度
会員数	242団体	約470団体
予算額	300万円(県補助金)	約1,500万円
事業数	6事業(2000年度)	29事業
	総会 フォーラム 研修会3回 情報誌発行1回	総会・フォーラム・研修会13回 意見交換会4回・啓発イベント4回 買うエコ大賞・キャンペーン・啓発リレー 情報誌発行2回・メルマガ発行 (外部事業への出展・講師派遣は除く)

※注) グリーン購入について「意味も知っている」「聞いたことがある」の合計



2003年 初の事業所見学セミナー(麒麟ビール滋賀工場)



2007年 小売店での啓発イベント(平和堂アル・プラザ水口)



2010年 買うならエコ!リレー(高島市役所)



2014年 第1回買うエコ大賞 表彰式

INDEX



- まもなく設立20周年! ～ グリーン購入から始まり、
ひろがる、会員連携による様々な活動 ～ 1
- 活動レポート 2
- エコ情報室 3
- 研究会情報 生物多様性と環境・CSR研究会 4
- 研究会情報 エコ交通研究会 5

- 滋賀GPN会員でつなぐリレートーク
株式会社 コクヨ工業滋賀 6
- 農業女子見～つけた!! ② 6
- 新規会員からひとこと 7
- 第3回「買うエコ大賞」環境活動表彰 受賞者 紹介 8
- 編集後記 8



活動レポート

「夏休み！親子エコ体験クルーズ」

開催日：2018年8月3日 参加者：61名

小学生と保護者でご参加いただき、環境学習船「megumi」の船上で、琵琶湖・環境・エネルギーに関する学習会を開催しました。琵琶湖環境科学研究センター 一瀬諭さんご指導によるプランクトン観察、県エネルギー政策課 中嶋洋一さんのエネルギーのお話と、船搭載の太陽光発電、風力発電装置の見学、県地球温暖化防止活動推進員の皆さんによる再生可能エネルギーの実験などに、子どもたちが目を輝かせていました。



第3回「買うエコ大賞」第1次審査会

開催日：2018年9月5日

滋賀県産のエコ商品・エコサービスの表彰制度「買うエコ大賞」。公開プレゼンテーションと第1次審査会を開催し、環境活動部門の受賞者2団体と、商品・サービス部門のノミネート6商品を選定しました。その後、10月から2019年1月にかけてノミネート6商品を様々な場面でPRしつつ、一般投票を実施しました。一般投票の結果、投票数最多の商品を「大賞」として表彰します。詳細→ <https://kaueco.net/>



「グリーン購入フォーラム2018 in 滋賀」

開催日：2018年10月19日 参加者：84名

「グリーン購入からみたSDGsの世界潮流」をテーマに開催。基調講演の日本政策投資銀行 執行役員 竹ヶ原啓介さんに「ESG投資からみたSDGs」について、たねやグループ 経営企画室室長 水森貴文さんに「たねやグループのSDGsの取組」について、お話しいただきました。また、「買うエコ大賞」ノミネート6者にも事例報告いただき、様々な方向からSDGsについて考えるフォーラムとなりました。



会員講師派遣事業

期間：2018年10月～12月

以下14名の方に3大学へご出講いただきました。ティーエムエルデ 本江宗明さん、日立建機ティエラ 牛谷健司さん、クミノ工房 井上慎也さん、みんなの奥永源寺 前川真司さん、滋賀銀行 嶋崎良伸さん、おごと温泉びわ湖花街道 佐藤祐子さん、滋賀ダイハツ販売 後藤敬一さん、小堀正広さん、旭化成住工 松宮秀典さん、木の家専門店谷口工務店 谷口弘和さん、琵琶湖汽船 川戸良幸さん、びわ湖放送 東清信さん、輪の国びわ湖推進協議会 南村多津恵さん、滋賀県交通戦略課 芝久生さん。ご協力ありがとうございました。



「中小企業の経営戦略としてのSDGsセミナー」

開催日：2018年11月12日 参加者：60名

風かおるさんがファシリテートするカードゲーム「2030SDGs」でSDGsの理念、自分と世界との関わりを知り、SDGパートナーズCEO 田瀬和夫さんの講演で学びを深め、油藤商事 青山裕史さんと木の家専門店谷口工務店 谷口弘和さんの報告から取組のヒントを得ようというセミナーでした。カードゲームでは参加者の歓声があふれ、学びだけでなく交流も深めた、充実したセミナーとなりました。



「三方よしエコフェア2018」

開催日：2018年12月8日 来場者：約1,200人

6回目を迎える今年のテーマは「エシカル消費」。環境省認定環境パフォーマー「らんま先生」のサイエンス・ショーでは「エシカル消費」をテーマに、ごみ問題や児童労働のお話もありました。また、「三方よし小学校～子どもエコ座談会」では、GINLALAのららさんが先生に、ぎんさんがやんちゃな小学生に扮して、県 県民活動生活課の谷澤先生と共に、11名の小学生と一緒に「エシカル消費」についてディスカッションしました。



ゼロエミ研究会 プラスチックごみ勉強会

開催日：2019年1月28日 参加者：19名

プラスチックごみが世界的な課題となる中、研究会メンバーの情報交換を兼ねて勉強会を行いました。アミタ 環境戦略デザインチームの近藤大智さんからプラスチックごみの現状について情報提供いただきました。目の前の緊急課題となっている事業者も多い中、熱心な質疑、意見交換が続きました。



エコ情報室

祝『日本農業遺産』認定! 『世界農業遺産』認定に向けて大きな一歩!
～森・里・湖^{うみ}に育まれる 漁業と農業が織りなす琵琶湖システム～

滋賀県 農政水産部 農政課 参事 青田 朋恵



◆世界農業遺産とは

「世界農業遺産」とは、社会や環境に適応しながら発達してきた伝統的な農林水産業と、それに関わって育まれた文化、景観、生物多様性などが一体となった世界的に重要な農林水産業システムで国連食糧農業機関（FAO）がそれを認定します。「生きている遺産」とも言われ、過去から未来へと進化し引き継がれていく、持続可能な農林水産業と農山漁村の営みが対象となります。正確には「農林水産業」遺産です。認定数は、世界21ヶ国57地域、うち日本11地域（2018年12月現在）。国内では、和歌山県の「みなべ・田辺の梅システム」や岐阜県の「清流 長良川の鮎システム」などが既に認定を受けています。

◆琵琶湖と共生する農林水産業

1,000m級の山々に囲まれ、琵琶湖集水域が県土の96%を占めている滋賀県では、琵琶湖の水質や生態系を保全していくために、県内の水田や県土の1/2を占める水源林の保全が重要です。こうした背景のもと、1,000年以上の歴史を持ち、中世から「資源保全」の考え方が培われてきた伝統漁業、琵琶湖固有種のニゴロブナなどが琵琶湖からやってきて産卵・繁殖する「魚のゆりかご水田」、また水田で獲れた米に水田に遡上してきたニゴロブナを漬け込む鮎（ふな）寿司などの食文化が祭礼や人と人の絆の醸成に深くつながってきたことなど、古文書に裏付けられた営みは、独自性も高いものです。また、琵琶湖の環境や生きものを守り、日本一の取組面積を誇る「環境こだわり農業」や水源林保全など、滋賀の風土と歴史の中で生み出されてきた「琵琶湖と共生する農林水産業」は、世界に誇るべきものです。

◆「世界農業遺産」認定に向けた取組

この琵琶湖と共に育まれてきた農林水産業を、国内外の方々にもっと知っていただき、味わい、楽しんでいただきたい。そして、地域の活性化につなげたいとの思いから、2018年3月に琵琶湖と共生する滋賀の農林水産業推進協議会（会長：三日月大造知事、現会員548名と110団体（県および県内全市町を含む））を地域の皆様と共に立ち上げ、「森・里・湖（うみ）に育まれる漁業と農業が織りなす琵琶湖システム」とのタイトルで6月に農林水産省に申請し、8月の一次審査（書類審査）、今年1月の二次審査（プレゼンテーション）を経て、**2月15日、農林水産省から「『世界農業遺産』の認定に向けた国連への申請の承認」および「『日本農業**

遺産』の認定」の通知を受けました。

ここに至るまで、皆様から多大なご支援・ご協力を賜りましたことを感謝申し上げます。そして、このたび獲得した世界への挑戦権をもとに、FAO（国連食糧農業機関）への申請書提出など、『世界農業遺産』の認定に向けた取り組みはまだまだ続きます。引き続きのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします!



伝統的な『エリ漁』と湖岸に広がる水田



湖魚が遡上する水田での生きもの観察会

◆滋賀から世界へ、世界から滋賀へ

琵琶湖と共生する農林水産業、この「琵琶湖システム」は、国連の定めた持続可能な開発目標（SDGs）の17の目標のうち、特に「6 Clean Water（安全な水を世界に）」、「14 Life below Water（水産資源の保全）」、「15 Life on Land（内陸淡水生態系の保全）」、「17 Partnerships for the Goals（パートナーシップで目標を達成しよう）」の達成に寄与するものです。認定を契機に、琵琶湖と共生する農山漁村の魅力と価値を国内外に発信し、琵琶湖の環境に配慮して生産した商品の高付加価値化や観光資源としての活用等につなげながら、地域の皆様と共に、農林水産業を健全な姿で次世代に引き継いでまいりたいと考えています。



【お問合せ先】
滋賀県農政水産部 農政課
TEL: 077-528-3925 FAX: 077-528-4880
E-mail: shiga-giahs@pref.shiga.lg.jp

研究会情報 1

生物多様性と環境・CSR研究会

生物多様性と環境・CSR 研究会 事務局 谷口 浩
(株式会社ダイフク 人事総務本部 環境品質グループ)



私たちは、生物多様性の恵みを受けて豊かな暮らしを送っていますが、一方で、事業や暮らしを通して生物多様性に様々な影響を与えています。直接的に生物多様性に関わる農林水産業や生物資源を商品として扱う飲食業、食品販売業はもちろんのこと、どのような業種も紙やエネルギーなどの資源を例外なく使用し、事業活動が生物多様性の恵みによって支えられています。自らの事業活動と生物多様性との関係を知り、生物多様性に与えている負の影響を軽減する取組を行うことは、将来にわたって事業を継続することにもつながります。生物多様性の喪失は、地球温暖化問題と同様に深刻な問題ですが、具体的に何をすればいいのかイメージしづらいため、企業における取組も進んでいないのが実情のようです。

そこで、私たち生物多様性と環境・CSR研究会では、2015年の発足以来、年に1~2回のセミナー開催を通して、生物多様性問題に取り組む意義や取組事例の情報を提供することで、県内企業の理解促進と取組促進を図り、同時に参加者の交流を図ることで新たな企業連携の活動につなげることを目指しています。

2018年度のセミナーは「これからのお金の流れと企業の持続可能性について～生物多様性の視点から考える～」と題して7月27日に草津で開催し、43名にご参加いただきました。

基調講演の講師には、社会に貢献する「いい会社」への投資で話題を呼んだ鎌倉投信の創業者 新井和宏さん（現 株式会社 eumo 代表取締役）をお招きしました。

7/27に開催したセミナーの様子



新井さんの基調講演



パネルディスカッション



【基調講演要旨】

海外ではSDGsやESG投資の流れが拡大している。投資家が化石燃料企業から投資を引き上げるダイベストメントの動きが続き、この流れは止められない。企業が変わる必要がある。企業が生き残る戦略のうち最も基本的なことは継続して買ってもらうこと。普通は価格優位性を追求するのがセオリーだが、価格競争に陥り持続可能な企業経営は出来ない。これが趣味的な領域になると人によって値幅に差が出る。持続可能性には人の趣味的領域に入る事が重要。お金の翻弄されてきた個人と社会が大きく変わろうとしている。今だけの財務成績ではない過去と未来につながる財産の積上げが求められている。社会や環境を自分事として拡大解釈して人がやらないことをやれる人が、人やお金を集める。

その後、土、木、湖、花といった自然資本に関する事業を営む県内4社の事例報告とパネルディスカッションを行いました。信楽焼の日産陶業から宮脇由直さん、県産間伐材を使ったおもちゃを製造するクミノ工房から井上慎也さん、琵琶湖真珠の販売を営む神保真珠商店から杉山知子さん、オーガニック・コスメを製造・販売するみんなの奥永源寺から前川真司さん、山から湖までつながる事業者の報告から、滋賀の豊かな自然と、この地から広げる持続可能社会の可能性を改めて感じさせられました。

今回のセミナーでは、生物多様性の具体的な取組報告はありませんでしたが、滋賀の豊かな自然資本を利用しながら守ることにもつなげている4名の事業者が、正に体现されていたと思います。CSRの概念とは違う、各者の存在意義としての取組に大変刺激を受けました。そして、お金以外の新たな価値の考え方を見定める時が来ていると感じました。世界のお金の流れは、持続可能性に向けて本気で動き出しています。「環境」だけではない、「これからのグリーン購入」の取組を広げる必要性を感じたセミナーとなりました。

研究会情報 2

エコ交通研究会

エコ交通研究会 事務局 南村 多津恵
(輪の国びわ湖推進協議会 運営委員)



あなたの事業所では、従業員の皆さんは何に乗って通勤されますか？出張には何に乗って出かけられますか？少なからぬ方が「クルマ」と答えられるのではないのでしょうか。

エコ交通研究会は、「移動のエコ化」をめざして活動しています。2017年8月に「エコ通勤研究会」の名称で、4企業、2行政、2団体が参加して動き出しました。当初の目的として掲げたのは次のとおりです。「通勤における自動車の利用を公共交通および自転車、カーシェアリング等の環境配慮型の交通利用にシフトすることで、交通部門のCO2排出量を削減する。これにより個人の自動車利用が当たり前という現代のパラダイムを転換し、通勤以外の移動の場面においても公共交通および自転車等の交通分担率を上げ、滋賀社会の低炭素化に貢献する。」

初年度は、まず「エコ通勤」を広く知らせ、一緒に取り組む仲間を作ることを目標に、11月に第1回公開セミナー「エコ通勤で経営をステップアップ！効率的に 健康的に 環境配慮型に組織が変わる『エコ通勤優良事業所認証』取得のススメ」を開催しました。エコ通勤の意義と認証制度のメリット等を伝え、事業所でエコ通勤に取り組むためには、まず従業員へのアンケートをとることや全社的な仕組みづくりが効果的なこと、交通の不便な事業所では業務での移動を効率化することでクルマ利用が減らせること等が事例紹介から示されました。約40名にご参加いただき、これをきっかけにメンバーが増えました。

10/4に開催したセミナーの様子



三日月知事の講演

2018年4月からは滋賀GPNメールマガジンでエコ通勤リレーコラムの連載を研究会で分担して始めました。総会の情報交換会でエコ通勤のテーマを受け持ったり、グリーン購入実践講座でアピールしたり、グリーン購入キャンペーンと連動したりしながら、クルマの利用を減らすことを地道に呼びかけ続けています。

「エコ通勤」の名だと活動の幅が限定されることから、8月に「エコ交通研究会」と改称しました。通勤だけでなく、業務でのクルマ利用を減らす仕組みづくりもあわせて提案しています。

はじめは温暖化防止を主目的に考えていましたが、エコ交通の取組には職場を

改善する様々な可能性があることも、活動しているうちに見えてきました。マイカー通勤をやめるためには公共交通や乗り合わせの人と都合をあわせる必要が出るため、働き方改革や職場のコミュニケーション向上にもつながります。必然的に運動量が増えるので、従業員の健康維持にも役立ちます。

さらにまちづくりの視点も交えて、10月4日に第2回公開セミナー「交通シフトでSDGsを実現しよう！温暖化対策も社員の健康・満足度向上も」を開催しました。土井勉さん（大阪大学COデザインセンター）から、誰もが暮らしやすく魅力あるまちをつくるためには、自動車交通を減らし、公共交通を利用することでその運営を支えていく必要性が示されました。三日月知事は公共交通の維持活性化のための仕組みづくりを提案。事例報告では、エコ通勤の取組で健康診断の結果が実際に改善したデータが紹介されました。約80名にご参加いただき、アンケートでも好評でした。

研究会では、「2020年度中に県内事業所での通勤または事業活動での車利用が5%減少する」という目標を立てています。月20日の出勤日のうち1日をマイカーからエコ通勤に切り替えるだけで達成できる数値です。天気や季候のいいときだけの取組でも、導入することで確実に効果は上がります。「クルマに乗らない」選択肢が頭に浮かぶようになれば、各人の日常でのクルマ利用も減るでしょう。できるだけ敷居を下げ、メリットをわかりやすく提示して、ともにSDGsを達成する仲間を増やしていくために情報発信や活動支援を続けていきます。



パネルディスカッション



Relay
Talk

滋賀GPN会員でつなぐ

リレートーク>>>

株式会社 コクヨ工業滋賀
代表取締役社長 三宅 一成

1988年にコクヨの紙製品の生産拠点として滋賀県愛荘町に工場を構えた当社は、昨年30周年を迎えました。現在では、コクヨの代名詞であるキャンパスノートを中心に複写伝票、コピー用紙等を生産する国内最大級の紙製品工場に成長しています。

当社の環境の取り組みは2001年にISO14001を認証取得して以来、社内環境整備とリスク管理を進めてきました。2007年には地域社会に貢献するため、衰退する琵琶湖のヨシ原の保全活動とヨシの新たな活用を進める環境事業「リエデンプロジェクト」をスタートし、社内活動から地域社会との協働活動へと大きく発展しています。



ヨシでびわ湖を守るネットワークによるヨシ刈り

2009年に設立した活動組織「ヨシでびわ湖を守るネットワーク」は、地域社会と連携した冬のヨシ刈りボランティア、夏の外来魚駆除釣りなど年間を通じた活動を実施しており、ネットワーク（現在130社）の先導的立場で琵琶湖環境の保全活動を進めています。

一方、ヨシ活用では、時代に合ったヨシの活用を目指すエコ文具「リエデンシリーズ」を創り出し、本業の生産活動の中で、「刈る」「作る」「使う」の活用サイクルを循環させています。近年では新たな商品群「びわこ文具」を展開し、環境+αの付加価値を付けた魅力あるヨシ商品を発売し好評を得ています。

また、この売上の一部を地域社会に寄附することをはじめ、ボランティアで刈ったヨシを地元から買い上げ有効活用することで、「地域によし」「商品によし」「環境によし」の持続可能な社会づくりを進め、新しいヨシ産業の先駆けとなっています。

おかげさまで、多くのご支援を受けたこのプロジェクトは、昨年2月に滋賀県の環境関連表彰を2件受賞し、6月には、秋篠宮同妃両殿下ご臨席のもと東京で日本水大賞「経済産業大臣賞」を受賞させていただくことができました。さらに、今年2月20日には、文部科学省主催：青少年の体験活動推進企業表彰において「審査委員会特別賞」を受賞させていただくこととなりました。



日本水大賞受賞式

これからも更に広く地域社会との繋がりを大切にし、商品と活動を通して共感の輪を広げて参りたいと考えております。

今回は、株式会社ノエビアさんをお願いします。



びわ湖文具シリーズ

株式会社 コクヨ工業滋賀

〒529-1203 滋賀県愛知郡愛荘町上蚊野312
TEL: 0749-37-3611 FAX: 0749-37-3686
<https://www.kokuyo-shiga.co.jp>



農業女子見~つけた!!②

ヨコタ農園

よこた なおみ
横田 尚美さん

★農業を始めたのは、いつから?どこで? 専業農家としては2010年から。長浜市高月町です。

★農業を始めたきっかけは? 実家が兼業農家で、初めは私も勤めをしながら農業を手伝っていました。そのうち高齢になられた近所の方々からの田んぼを受け継ぎ面積が増え、将来を見据えて、いちごや野菜の複合経営に取り組むことになり、思い切って勤めを辞め専業になりました。

★頑張っていることは? お客さんの喜ぶ笑顔が見たくて、減農薬、無農薬で頑張っています!

★夢は? 農園の作物や地場の野菜、自家農園の加工品を販売する、道の駅のようなお店をつくりたい。これは私たち夫婦の夢です!

4月28日 春の感謝祭「いちごフェスタ2019」開催!

台風被害でハウスが全滅しましたが、皆様のご協力の一部復旧した現在の農園の報告を兼ねて行います。TEL.0749-53-2808



新規会員から ひとこと

2018年8月1日から2019年2月20日までの入会者
(団体名の50音順)



株式会社井之商

代表取締役 井上 昇

「太陽の光を、とどけるしごと。」スカイライトチューブ(太陽光照明システム)の普及に取り組んでおります。太陽の光で笑顔をお届けしてまいります。よろしくお願いいたします。



地域エネルギー研究会

代表理事 藤田 雅也

身近な省エネ行動や再生可能エネルギーに関する情報交換会・見学会等を開催し、「エネルギーのグリーン購入」について考える仲間が集まっています。ぜひ一緒に。



端材工房

代表 岩波 正

おもちゃ、雑貨を中心に木製品を手づくりでつくっています。木製品を通して、環境に関心を持っていただけるような活動に取り組んでいきたいと思っています。



淡海を守る釣り人の会

代表 津熊 操

主に滋賀県外から琵琶湖に通う釣り人で構成され、他のボランティア団体や自治体の方と連携して琵琶湖・瀬田川の清掃活動、安全とマナーの啓蒙、情報発信を行っています。



有限会社橋本燃料

専務取締役 橋本 翔太

LPガスを中心に家庭へのエネルギー供給を通して安心・快適な生活をお届けしています。今後はバイオディーゼル事業を軸に持続可能な社会の実現にも貢献していきます。



一般社団法人お結び。

代表理事 堀 豊

アインズ館からお結び館としてリニューアル。SDGsの交流の場として運営。寺社の空間をシェア出来る仕組みを考え活動を開始。人と所と事を結ぶ活動をしています。



フラワープロデュース 一花

代表 岩上 智佳子

「Biwako Sweet Project」の活動として、地産地消・生物多様性保全・花育など積極的に取り組んでいます。これからも地域貢献できる花屋を目指します。



志我の里 -shiganosato-/ 薪来歩 -makilife-

代表 池田 卓矢

古民家をセルフビルドで移築再生した建物で、自然と共に生きる体験の宿を運営し、ヨーロッパから直輸入した薪ストーブや自然エネルギーを取り入れた豊かな暮らしを実践、提案しています。



株式会社みんなの奥永源寺

代表取締役 前川 真司

琵琶湖の源流「奥永源寺地域」で、SDGsでエシカルなオーガニックコスメ「MURASAKI no ORGANIC」を販売しています。新しい時代づくりに挑戦して参ります！



株式会社スプーンテーブル

代表取締役 増村 匡人

2030SDGsの達成に向けてもはや待ったなし！すべての人々がエシカル消費やサステナブルに目を向けていく必要があります。飲食店として情報発信をしていきます。



立命館大学エコデザインサークル Reco.lab

代表 瀧本 颯

当サークルでは環境問題について考え、身近にできるエコに繋がる活動を行っています。消費と購入の立場から環境に配慮した消費者となることを目標としています。

現会員数：475 団体 [企業 389、行政 21、民間団体 65] (2019年2月28日現在)

第3回「買うエコ大賞」環境活動表彰 受賞者 紹介

低炭素社会づくりに向けた
エコ通勤活動の推進

株式会社 日立建機ティエラ

通勤車両から発生する通勤時のCO₂排出量を削減しようと、事業所の全従業員（場内協力会社含む）に啓発活動を実施し、高効率車への乗換えや公共交通機関・自転車通勤・徒歩での通勤を呼びかけた。また、駐車場拡張工事に伴い70台のバイク専用置場の新設、自転車置場の整備、シャワー室の更新も実施。駅から遠い事業所であるからこそ、エコ通勤は社員の健康増進にもつながると取組みを展開し、2015年6月には国土交通省「エコ通勤優良事業所認証」も取得。通勤手当のデータから試算したエコ通勤によるCO₂排出抑制貢献量は、2014年度の56.4t-CO₂/年から2017年度は106.3t-CO₂/年となり確実に拡大してきている。効果をデータで把握し、健康経営にもつながるエコ通勤活動を今後も進めるという前向きな姿勢が評価された。今後も「みんなでつこう！～健康ティエラ～」を合言葉に従業員全員で低炭素社会づくりに貢献していくとのこと。



滋賀県甲賀市水口町笹が丘1-2
TEL: 0748-62-6431

空き家再生による資源再利用と、
商店街活性化による地方創生
～大津町家ホテルプロジェクト～

株式会社 木の家専門店 谷口工務店

空き家の利活用を促し、商店街を拠点とする街の活性化に貢献しようと、大津市中心部の商店街の空き店舗7棟を改修した「商店街HOTEL 講 大津百町」。2018年度「グッドデザイン賞」も受賞された。家屋の解体現場で発生する廃棄物は、平均2～3.5トン。今回対象となった建物も傷みが激しく、通常なら壊すところを大工の技術で回収。産業廃棄物量を抑え、再利用できる建物へとリノベーションした。全棟の床、階段、浴室に国産材のヒノキ、杉を使用し、国産材使用によるCO₂削減と加工時エネルギーを一削減。全棟に庭をつくり緑を増やした。プレオープン時には記念茶会を催し、県知事、大津市長と共に商店街関係者や地元企業を招いて話題を集め、多くのメディア取材を通して大津の魅力を発信できた。オープン後は商店街とのタイアップで、宿泊客の地元商店、地元飲食店利用や地域観光につなげることが期待できる。環境配慮に加えて地域活性化を願う姿勢が評価された。



滋賀県蒲生郡竜王町山之上3409
TEL: 0748-57-1990

編集後記

環境雑誌（環境管理2015年6月号）の中の記事が目にとまり、今でも時々読み返している。表題が『史上、最も大気に悪影響を与えた男、聖者か、悪魔か?』と記され次の様に述べられている。アメリカの科学者トーマス・ミジリー・ジュニア（1889～1994）は、「有鉛ガソリン」と「フロン」の発明者である。どちらも人々の生活環境を飛躍的に改善した「夢の化学物質」だったが、20世紀の「環境破壊の元凶」と評価されることとなった。1927年、ガソリンに鉛を添加することで自動車のノッキング問題を解決し、その功績からアメリカ化学学会から数々の賞を受賞している。しかし、有鉛ガソリンは害が明るみとなり禁止される。その後、彼は「フロン」を開発することになるが、フロンはオゾン層を破壊し、地球温暖化の原因になることが明らかとなった。

これまで良かれと思っていたものが、ある日突然使用が制限されたり禁止となってしまう。最近ではプラスチックが取り上げられているが、食品を包装するのに安全で経済的であり、生活する上で切り離すことができない。生活の利便性と環境問題がいつの時代も繰り返して問われているように思う。

（幹事／日本電気硝子株式会社 外間 喜春）

2018年は全国的にも非常に災害の多い年だった。西日本豪雨災害、数多くの台風、記録的な猛暑、大阪と北海道での地震など。この気象が、地球温暖化に起因しているかどうかは不明だが、少なからずその可能性はあると感じる。この異常気象が、日常気象になった場合、やはり人間の意識を変えていかなければいけない。

「Think Globally, Act Locally」という言葉がある。「地球規模で考え、足元から行動せよ」という標語。環境問題を語るうえで非常に重要なフレーズであるが、今一度、この言葉をしっかりと自分に落とし込みたい。

私自身は昨年、全国各地で水害や台風の大きな被害があったことからボランティア活動に奔走した年でもあった。そして「他喜力」を学んだ。「できる人ができる時にできる事をする」。他人の喜びことに全力で対応することが自身の大きな力になる。人の喜びが我が喜びである。この考え方を実践した年でもあった。この精神を持ってボランティア活動を行うととても清々しい気持ちになれる。

この考え方を、自身の仕事にも家庭にも環境問題にも地域社会貢献にも当てはめ、これからも全力で走っていきたい。

（幹事／油蔭商事株式会社 青山 裕史）



編集・発行／一般社団法人 滋賀グリーン購入ネットワーク

〒520-0807 滋賀県大津市松本1-2-1 大津合同庁舎6階

TEL: 077-510-3585 FAX: 077-510-3586

Eメール: sgpn@oregano.ocn.ne.jp URL: <https://www.shigagpn.gr.jp/>

